



題字、山名一雄

第38号 平成元年7月1日

発行 者 群馬県山岳連盟
〒371 前橋市大手町1丁目1-1
群馬県庁観光課内
TEL 集 (0272)23-1111
編 群馬県連盟編集委員会
責任者 羽野順一
印刷 所 森田印刷
<定価 1部 100円>



群馬県山岳連盟会長

山田昇、三枝照雄両君を偲んで

星野光

激動の昭和も終りに近い、昭和六十三年から、新しい時代の華明けとも言える平成元年にかけての三年間は群馬県山岳連盟にとって、最も輝かしい足跡の年であると共に悲しい試練の年でもありました。昭和六十二年十二月二十日、この日を私は生涯忘れることはないでしょう。群馬県冬期アンナプルナ一峰登山隊が八木原隊長を中心に、十四名の精鋭で冬期初登に成功したのです。しかも無酸素で、何と素晴らしいことであろうか。私は当時の総隊長として、登山史上に永遠に消えることのない快挙に胸が熱くなる思いでした。それは人間の精神力と、高度な技術を駆使して、人跡未踏の自然への果敢な挑戦をなした感激でもありました。十五時十七分、八〇三〇メートルの頂上に立った、三枝、山田、小林、斉藤の四名、喜びとねがいの混ざった声が流れる、その直後、小林、斉藤両隊員の思いもよらぬ転落事故が発生したのです。明暗を分けたこの一瞬は、八木原隊長手記の中の一節、「アイゼン岩にこすれた赤い火花、南壁を赤く染めた残照」がよく物語っています。悲しみを越えてすぐ次の目

星野光

戻した夜、再び現れたオーロラは、激しさもなく、白く穏かな光に変わっていた」とも報じています。山田君も三枝君も共に群馬の、しかも沼田市の出身なのです。傑出した二人を遠く北米の地で同時に失った郷土の悲しみは想像に絶するものがあります。去る四月二十二日、二人の葬儀が沼田市の斎場と市川町実相院とでしめやかに執り行われました。葬儀委員長として式場に立った私の脳裏に去来するものは、あのアンナプルナ登頂の一コマ、コマであり、ありし日の姿でした。この日谷川岳の雪は一段と白く千名に近い、全国の山の仲間、長い暖かい、焼香が続く、別れを惜しんだのです。捜索活動に寄せられた心温まる、協力とともに、感謝にたえません。私たちはあんなくましい男達にもう逢うことはできませんが、あの極北の永遠の光の中に彼らの笑顔と、声とを、求めることができるでしょう。そしてその壮絶な死は、マッキンリーの有限語りつがれることでしう。心から冥福を祈ってやみません。

三月初八日の定例理事会に於いて八木原より、岳連内における募金活動の要請を受け、全員同意を得る。そして、八木原は対策本部より、新聞関係などに呼びかけをする。岳連事務局より傘下の団体に通知を出すこと、岳連内の受け付けは田中と事務局の女屋が行うことになった。当初は、今回の遭難事故が一人のことであり、山田、三枝に関係のない団体では理解が得られず、この募金に対しても、反対の声もあつたのは、いたしかたのないことであつた。捜索隊が、三名の遺体発見で収容隊となり、二十名近くの隊員が現地に向かつて、収容活動が始まったので、募金集めは急を要した。事務局より、二回目の募金協力要請を出し、友人、知人、関係団体に、足で廻り、電話で協力を呼びかけた。岳連関係の募金は、加盟団体、及び団体の個人、一般の方々に呼びかけ、集り次第、本部に送った。又、協力頂いた方、団体には、個々に受領証を発行した。募金活動が始って一ヶ月、四月の理事会までに、三三〇万円の募金が集った。一般の方々の中には、五百円、千円の募金もあったが、山田隊が、社会に関心を持って見られていたことが嬉しかった。遭

難対策本部にも、全国より沢山の募金が集まっているとのこと、遺族の負担も少なくなり、又、現地での遺体収容もできたことから、募金期間を四月末日までと、八木原、樋口、女屋と決める。

募金総額 合計 4,641,663円
岳連関係 265,000円 1,363,800円
個人 91,000円 1,602,000円
一寄附者及団体 71,000円 1,675,863円

以上の金額が、今回の募金活動により集められたもので、五月理事会に於いて、マッキンリー遭難対策本部に渡すことが出来ましたことを報告いたします。又、今回の募金に、群馬県山岳連盟傘下の会、並びに会員の方々、そして大勢の一般の方々に協力頂き、本当に厚くお礼申し上げます。有難うございました。

四月十一日、成田空港に、現地で収容活動を行って帰った隊員達を迎えた時、心より「苦勞様と、頭の下がる思いであつた。又、山田、三枝達は、世界の山岳史に残る記録をつくり、群馬の山岳志士者にとって、誇りでもあつた。彼等の登山歴を飾る世界の高峰、登りを見る限り、いつも危険とは背中合せであつた。いつかは危惧して見てはいたのだが、あまりにも早かつた。しかしタウラリ遠征で初めて八千米に立った山田は、私にはいい夢を見せてくれた。『誰でも登れるヒマラヤ』という山田の言葉に、輝いた高校生の目の色が忘れられない。合掌。

マッキンリー遭難報告と 山田、三枝、小松三君を偲んで

マッキンリー遭難対策本部長

八木原 園明



チョー・オユーの頂上 左山田右三枝

山田昇君と三枝照雄君が東京の小松幸三君と共に冬のマッキンリー登山中に遭難死してしまった。昨年十二月のアンナプルナI峰南壁の冬期初登攀を成し遂げ、全く言葉もなかった。

下山中に転落死してしまった小林

名全でこの世に居なくなり、一九八二年秋のタウラギリI峰北壁ペアルート初登攀者(山田、三枝、小松)も全てこの世を去ってしまった。今さらながらに第一線のヒマラヤなどの高峰登山の厳しさ、人間に対する大自然の容赦のなさに慄然とし、その恐ろしさを思い知らされた。

ここではこれまでの山田、三枝君の登山の実績と彼等が果たそうとしていた夢を書き記し、何故冬のマッキンリーに向ったのか?そして今回の遭難対策本部長としての遭難の第一報から遺体収容までの経緯等を報告し、三君を偲ぶと共に彼等の大きな代償を教訓にし、今後の実践者への警鐘にもしたいと思う。

山田、三枝君の海外登山の実績は別表を見て頂けば一目瞭然であるが、単に回数が多さなどだけに感心していたのでは山登りをする人間としてはあまりにも皮相に過ぎるであろう。その内容について少し述べたい。

山田が岳連の海外登山研究会に入ってきたのは群馬岳連初のヒマラヤ登山であったタウラギリIV峰

登山が失敗し、小暮勝義委員長と田中壮信ドクターのRCII隊のエベレストが終り、宮崎勉、八木原がそのタウラギリIV峰への再挑戦をカモシカ同人隊でやろうとしている一九七四年八月であった。

当時の研究会の方向はヒマラヤにおける岩壁登攀であった。小暮、奥原彦治と共にカラム研究グループに入り、とにかく偵察を

ということで全容が解明されていなかったバインタ・ブラック(オーガ)、ラトック山群の一周を行つた。これは当初のヒマラヤ氷河からヒマア氷河縦断計画がフンザ地域閉鎖のため不可能となったためである。隊長が奥原彦治、隊員は岡庭(現・高橋)清、小林清、山田の四名であった。

ラトックの東側のパンマ氷河からチョクトイ氷河に入り、シム・ラ(峰)を越え、シムギン氷河へ下り込み、ヒマア氷河の源頭へ出たのであるが、これはシム・ラの峠を越えた世界初の記録であったろうと思う。急峻さ、ク

レバスの大きさ、多さもかなりのものであったという。

一九三七、三九年のシプトン隊もシム・ラそのものは越えておらない模様で、その北側とその東西からの測量などをしただけのよう

であらう、と思うからである。

しかし、ラトックI峰(七一四五)の登山を断念した日本山岳会東海支部隊(原真隊長)も山田達のトレースの後に逆コースのヒマ

へと一周をしている。この二隊によりラトック山群北面が解明され、写真の貴重情報もたらされた。このカラム計画は種々の検討の結果、最終的には一九七八年秋のタウラギリI峰南東稜登山となり、その時のシェルバ一名を含む六名の登頂者の一人となったのが山田昇であった。

初めのヒマラヤ挑戦で八〇〇mの峰のバリエーションルートからの登頂者となった経験と自信が山田

のその後の「ヒマラヤ登山人生」の出発点でもあった。

タウラギリ登山の前から日本ヒマラヤ協会のカンチェンジュンガ縦走計画に誘われていた私は、迷うことなく一緒に登頂した鈴木茂と共に山田をこの壮大な計画の中に引き入れた。

これはその前のカモシカ同人のタウラギリIV峰登山も同様の考えであったが、群馬岳連の中にだけいたのでは、結局群馬の力の範囲内での活動に終る可能性があり、より大きくはばたくことは不可能であると考へてのことであった。

これは私自身が小暮さんに連れられて東京のあちこちに連れ回されて教わったことでもあった。群馬岳連としても連立的に計画を立て、実行するのが不可能なこともあつた。

それにしても、この頃にはまさか山田が世界のトップクラスのヒマラヤ登山家になるなどとは夢にも思わなかった。それはもちろん当時の私自身の経験や実力の範囲では頭に描くことすらできなかった。

それから、この頃にはまさか山田が世界のトップクラスのヒマラヤ登山家になるなどとは夢にも思わなかった。それはもちろん当時の私自身の経験や実力の範囲では頭に描くことすらできなかった。

たからではある。後年、私は「群馬モンロー主義」なるものを口にするようになるが、自分や回りの者の行動の世界を拡げることの大切さとともに、その足下、基盤を固めることがそれ以上に重要であることも皆に知ってもらったためであった。

川崎に住んでいた山田にとって、活動の場を東京に移すことは、かつて動きやすいくことになり、一九八〇年春のカンチェンジュンガ偵察、そしてその実力と人柄を買われての日本ヒマラヤ協会のケ

ダルナート登山学校隊の副隊長、と矢継早の登山が続くのである。三十九才でマッキンリーに散華するまでの山田の登山で特筆すべきはやはり、八〇〇m峰登頂の座数、回数の多さであらう。しかしその裏にはラトック一周、カン

チ偵察、ナンタカート搜索を含むと実に二十二回というヒマラヤ経験がある。

八〇〇m峰九座十二回という登頂は世界のヒマラヤ登山界でも三指に入り、現在の日本のヒマラヤ登山界では全く追随を許さなかった。しかし、山田の登山を評価するには八〇〇m峰の数ばかりでなく、その内容を良く見なくてはならない。主なものを挙げてみる。

一、エベレストの冬、秋、春の三シーズン、三度の登頂。

一度は北側から南側への初縦走を果している。

二、ハットトリックは二度。これは世界で三人目の記録。

他の二人とはヌーナートとクチカという十四座完登者。一回目はK2、エベレスト、マナスルと地域も離れ、夏、秋、冬と三シーズンであることに大きな価値がある。もちろん無酸素。冬のマナスルは二名だけの完全アル

バインスタイル。一九八五年。

二度目は一九八八年のチョモランマ、シヤパンマ、チョー・オユーであるが、八七年十二月のアンナプルナ南壁から数えると十ヶ月半で四座登頂でもある。十月月半で四座登頂は三枝を入れて五名、六年連続で冬の八〇〇m峰に向い、三回に登頂(エベレスト、マナスル、アン

ナプルナ南壁)十二回登頂のうちバリエーションルートからの「初登攀」が二回(タウラギリ南東稜と北壁、ペアルート)山田の八〇〇m峰の登り方と実績は単にノーマル

ルートから登るといことだけではなく、バリエーションルート、無酸素、冬期、アルパインスタイルそしてその組み合わせという風に困難性を常に追求しての登山であった。

もちろん一九七八年、二十八才という遅いデビューとしては時代がそういう方向になっていたということも

もちろん一九七八年、二十八才という遅いデビューとしては時代がそういう方向になっていたということも

もちろん一九七八年、二十八才という遅いデビューとしては時代がそういう方向になっていたということも

も隊長としての
事な準備期間に
ける私にとって
知っている群馬
が一番安心であ
った。でもアンナ
雪辱を果たした
中にとつては、そ
中にヒマラヤ登
経験させておき
台としてはエベ
だった。

2計画があり、
での準備活動に
ある。植村物語
り装備、食糧
だつて若く力のある者が必要なは

中から下つてしまひ、頂上での映
画撮影は出来なかつたが、三枝、
山田、名塚、佐藤、木本、阿久津
カメラマン、八木原が登頂し、登
山を終えた。

そして万を持しての一九八七
八年冬のアンナプルナ南壁への再
挑戦となる。期待通りの活躍で三
枝は山田、斉藤安平、小林俊之と
共に巖氷の頂上へ立った。

アンナプルナへ向う前、すでに
大々的に前宣伝のされている三国
合同チヨモラン縦走計画があつ
た。私は山田に「頂上への撮影ス
タッフにあきがあるなら、三枝を
TV班に入れてくれ。中村進さん
だつて若く力のある者が必要なは

「すだから」と云つてあつた。

一九八八年五月五日、山田達縦走隊が先に出発してしまい、完全な主役になったテレビ隊（最初からテレビが主役だった？）三名の名塚が報告いたします。

一人となつた三枝は、頂上で鯉の
 ばりを掲げ、雪のサンブルをとり、
 「群馬の皆さん見えますか？」と
 元氣な顔を山田の実家にいた我々
 に直接見せてくれた。三枝にとつ
 て二度目のエベレスト登頂であつ
 た。

三月六日早朝、薄明りくなつた
 家の外に出、新聞をとってきた私
 は、ベットの中でそれを読んでいた。
 六時過ぎ、枕元の電話が鳴る。
 早朝の電話と云えば、大体が娘へ
 のクラブ活動の連絡である。隣室
 の娘を呼んで受話器をとらせた。

齊藤安子さまと、山田の八〇〇〇峰十四座登頂へのパートナーとして同行し、彼自身にも山田に次ぐヒマラヤニストになって欲しいと願った我々の期待を裏切ることなく、その秋のシシヤパンマ・チョー・オユと連続登頂し、八〇〇〇峰四座五回という実績をあげるに至った。

「田中さんから」と云う。田中成幸さんだと当然思ったが、相手はヒマラヤ観光開発の田中祥治氏からであった。一瞬のうちにマツキンリーからの良くない知らせだと思った。当然である。普段、彼からこんな早い時間に電話がかかってくることはないからである。山田達が無事下山したのであれば

一九八八年末現在の世界の八〇もつ普通の時刻に、あるいは直
 接かかってくるはずである。

位にランされており、日本人では山田、尾崎隆に次いで三位であった。十五名中二名はすでになく、リタイア気味の登山家のことを考えれば、あつという間に彼等を追い抜き、十指に入るはずであつた。三十一才という若さであつただけに、元気に登り続けてさえないれば、山田より短期間の十四座完登も夢ではなかつたかも知れない、と思うとなおのこと残念である。

それと帰国が遅れているのは承知してはいたが、三月四日（土）から朝日新聞の記者が北極の大ゾリ競争取材のためにアラスカへ電話を入れ、山田隊の下山が遅れていることと、現地天候が悪かつたことなどから「遭難ではないかか?」と云い始めていたこともあつたからである。もちろんその時は笑い飛ばして否定したのではあつたが。

次に彼等が消息を絶った、という第一報の入った三月六日早朝から捜索隊の派遣、遺体の発見、収容と遺骨になって帰国するまでの

田中祥治氏からの電話は「サポートとして行っていた佐藤俊三氏がタルキートナへ下り、三人が帰って来ない。天候も悪かったし絶望だ」と思う。誰か一人英語の上手

ウェスタンクームよりのエベレスト

マウンテン・トラベル社には友人達がたくさん集まり、情報の収集、検討、今後の対応策が協議されていた。

の御家族の方に集まっていた。過去の報告と今後の方針を話し、マウンテン社で宮崎、佐藤の出発を見送っていた。お帰り願っ

今回の登山には派遣母体がない、た。

ということ、すぐさま四名の關係する組織（群馬岳連、日本ヒマラヤ協会、法政大II部山岳部OB会、カモシカ同人、GHMJ、RCCII、バイネ・ニ・アソブの有志や友人により「マツキンリー遭難対策本部」を設置し、今後の活動の中心とすることにした。四人との関係などから八木原が本部長となり、田中祥治が副本部長的となり、

しかし、その夜の本部員の打ち合わせの中で、日本側ではとにかく迅速な対応が山田達を救う最良の方法であろうとし、第二陣隊員のリストアップが行なわれ、翌八日の宮崎からの「天候が悪く、飛行機も飛ばない状況であるから人間の派遣は待つて欲しい」の指示も無視する形で、本格的な捜索隊の派遣が検討され始めた。

とにかく「三人は生存している」との前提に立つての態勢、対応をとることにする。考えられるすべての仮定、可能性、状況を出し合い、とにかく宮崎と佐藤光由の二名を翌三月七日夜に現地へ派遣することにする。

タルキートナに捜索隊が滞在しているといれば、いつでも手が打てる。一刻をも争う場合を想定すれば、先ず人間を現地に投入しておくべきである。あとで後悔したくない、ムタは承知であるとの意見が大勢を占め、本部側の「第二陣を派遣する」と宮崎の「いや、

先ずは「空からの搜索により彼等の生死の確認」である。生きてゐるとすれば「五二〇〇」の雪洞にゐる」としか考えられなかった。もつと下にいれば、下つて来るはずだからである。

「一切を現地の判断に任せる」と云つた私が、最後は「本部長の判断による決定である」としてし

アンカレッジへ着くまでは佐藤
俊三氏の報告を半信半疑で聞いて
いた宮崎も、空港の外へ出て、鼻
の奥までも痛くなる冷たい空気を吸
つて初めて、冬のマッキンリーの
厳しさを実感する。現地でも、佐
藤の下山により「山田隊遭難か」
が報じられ、一層その感を強くし
たという。

まい、ムダになってもいいから、
と行動の上部限を五二〇〇の雪
洞付近までとし、翌九日に尾形好
雄副隊長外十一名を派遣すること
にした。

搜索費用は全て家族負担とい
うことで了解は得たが、人数と期間
によつては莫大な額になる可能性
もある。急ぎき翌日にも御家族に

七日、山田、小松、三枝、佐藤の御家族の方に集まっていた。経過の報告と今後の方針を話し、マウンテン社で宮崎、佐藤の出発を見送っていただき、お帰りを願った。

しかし、その夜の本部員の打ち合わせの中で、日本側ではとにかく迅速な対応が山田達を救う最良の方法であろうとし、第二陣隊員のリストアップが行なわれ、翌八日の宮崎からの「天候が悪く、飛行機も飛べない状況であるから人間の派遣は待てど欲しい」の指示も無視する形で、本格的な捜索隊の派遣が検討され始めた。

タルキートナに捜索隊が滞在させていられ、いつても手が打てない。一刻をも争う場合を想定すれば、先ず人間を現地に投入しておくべきである。あとで後悔したくない、ムダは承知であるとの意見が大勢を占め、本部側の『第二陣を派遣する』と宮崎の「いや、事態がはつきりするまで待て」の押し問答が国際電話で繰り返される。

「一切を現地の判断に任せる」と云った私が、最後は「本部長の判断による決定である」としてしまひ、ムタになつてもいいから、と行動の上部限を五二〇〇の雪洞付近までとし、翌九日に尾形好雄副隊長外十一名を派遣することにした。

搜索費用は全て家族負担ということでは解は得たが、人数と期間によっては莫大な額になる可能性もある。急ぎよ翌日にも御家族に

技術と信用で地域社会に貢献する
総合建設業

建設株式会社

取締役会長 星 野 光

本社 群馬県沼田市下之町880番地 TEL 0278(23)4648(代表)

支店 東京都豊島区東池袋4-2-7 TEL 03-985-7631

支店 東京都豊島区東池袋4-2-7 TEL 03-985-7631



山 田 昇 1975年～1989年の海外登山活動記録

1975年 夏	カラコルム・ラトック山群トレッキング		
78年 秋	グウラギリ I 峰 (8167m) 南東稜		登頂
80年 春	カンチェンジュンガ偵察		
80年 秋	ケダルナート・ドーム (6831m)		登頂
81年 春	カンチェンジュンガ主峰 (8586m)		登頂
81年 秋	ランタン・リ (7236m)		初登頂
81年 冬	ナンダカート搜索		
82年 秋	グウラギリ I 峰 (8167m) 北壁		登頂
82年 冬	マナスル (8163m)		
83年 秋	ローツェ (8516m)		登頂
83年 冬	エベレスト (8848m)		登頂
84年 秋	マモストーン・カンリ (7543m)		初登頂
84年 冬	アンナプルナ I 峰 (8091m) 南壁		
85年 夏	K 2 (8611m)	} ハットトリック	無酸素登頂
85年 秋	エベレスト (8848m)		無酸素登頂
85年 冬	マナスル (8163m)		無酸素登頂
86年 春	トランゴ・タワー		
86年 夏	ヨーロッパ・アルプス		
86年 冬	マカルー (8463m)		
87年 春	マッキンリー (6194m)		
87年 夏	ヨーロッパ・アルプス		
87年 冬	アンナプルナ I 峰 (8091m) ①		無酸素登頂
88年 春	チョモランマ (8848m) ②		縦走者
88年 春	マッキンリー (6194m)		登頂
88年 夏	ヨーロッパ・アルプス (モンブラン 4807m)		登頂
88年 冬	アコンカグア (6959m) (9/5)		登頂
88年 秋	キリマンジャロ (5895m) (9/16)		登頂
〈五大大陸最高峰登頂 (135日間) エベレスト (5/5)～キリマンジャロ (9/16)〉			
88年 秋	シシャパンマ (8012m) ③		無酸素登頂
88年 秋	チョー・オユー (8201m) ④		無酸素登頂
89年 冬	モンブラン (4807m)		冬期単独登頂
89年 冬	マッキンリー (6194m)		冬期登山中に死亡
※ ①～④ 1987年冬～88年秋、10ヶ月半に8000m峰4座登頂。			

三 枝 照 雄 1983年～1989年の海外登山活動記録

1983年 冬	チョモランマ (8848m)		
84年 冬	アンナプルナ I 峰 (8091m) 南壁		
85年 秋	エベレスト (8848m)		登頂
87年 冬	アンナプルナ I 峰 (8091m) 南壁 ①		登頂
88年 春	チョモランマ (8848m) ②		登頂
88年 秋	シシャパンマ (8012m) ③		登頂
88年 秋	チョー・オユー (8201m) ④		登頂
89年 冬	キリマンジャロ (5895m)		登頂
89年 冬	マッキンリー (6194m)		冬期登山中に死亡
※ ①～④ 1987年冬～88年秋、10ヶ月半に8000m峰四座登頂。			

有限会社 山とスキーの店
石井
伊勢崎市中央町 18-8

旨の連絡もした。マスコミ他関係者にもそれを発表し、通知している。「決定なるものの簡単な撤回」も出来ない。内部だけの変更ではない。両者に葛藤があり、ジレンマがあった。

しかし、出来るだけ現地の意見を優先したい。万難を排して現地まで飛んだ隊員達の気持を尊重したい。それでも最後の責任は本部にある。正直、私も迷った。悩んだ。結局(収容)が二、三ヶ月も先に伸びることの困難さと辛さもある。

「やろう、やってもらおう」に変わるには時間はかからなかった。宮崎や尾形に云われては私が折れるのは目に見えていた。私を良く知るある本部員は「八木原が勉ちゃんや尾形と直接話をすれば、八木原が気持の上で負け、折れるのに決まっている」と看破していた。とにかく決行となり、「捜索隊」は「収容隊」に変わった。

そして無事収容することができた。それも三つもの遺体を少人数(途中で二名がタルキートナへ下ったため、十五名による収容作業であった)で三月十七日(現地)から四月一日の十六日間という短期作戦であった。全てが彼等三名のために良かれとの動きの結果であった。その申し出がうれしくもあり、ありがたかったのが本音であった。

収容を決定した際、安全、確実、短期収容には機動力を使いたかった。米軍他の協力は「生存している場合の救助」のみに得られる。遺体収容には国立公園外のランディングポイントまではヘリコプターや飛行機を出してくれる。「登頂」したか否かであるが、これはお困柄の違いでやむを得ない。日本人にとって「遺体」は行方不明のため、中であつた大切なものであり、回収したい。あろうビデオカメラ、スチールカメラ、アメリカ人にとっては単なる「ボディであり、物」であつた。か「途中から引き返す際」かは特外務省を通じて、在アンカレッジ定できない。何時か、ということ領事館から米陸軍の協力を要請しは二月二十二日まではオーストリタ。しかし、規則により協力は出ア隊三名に確認されており、天気来ない旨の返事を受け、独自に収容作業を行うことになった。それたらしいことが分っている。二月でも特段の配慮を得て、国立公園二十三(日本の二月二十四日)内の一〇〇〇フィート地点までアタックに出、その日に遭難しのヘリコプターによる約一トンの物資の輸送を受け、アプローチのアルバイトが大巾に軽減、短縮することができた。

四月六日(現地)に現地入りし三家族八名と星野岳連会長、佐藤三三、私の十一名は宮崎隊長らに迎えられ、領事館への挨拶の後、遺体となった山田、小松、三枝と対面し、最後の別れを告げる。その日の夕方から火葬が行われ、四月十一日(日本)に帰国し、三君のお骨はそれぞれの家へ無言の帰宅をした。

この時の現地の模様は星野会長に報告して頂き、捜索、収容については名塚秀二が報告いたします。事故の原因については全て推定、推測の域は出ませんが、一言で云えば「極北の烈風」による「転落死」であらう。

アンザイレンをしていたことから「下山中の事故」であらうと思う。ルートはそれほど困難ではない人の名前である。

捜索・収容隊の記録

捜索・収容隊長 宮崎 勉
隊員 名塚 秀三

四月十七日、アンカレッジへ、現地の日本人ガイドに迎えられタルキートナへ向う。すでに捜索隊として入っている宮崎隊長以下十二人は、山田パーティーの遺体が発見されてからは、装備と食糧の準備に忙しく、私達後発の五人も、各担当に別れて、いつでも入山出来る様に用意をする。

その夜ミーティングが開かれ、現場までのルートは、山田パーティーと同じ、ウェストバットレストからのノーマルルートを五二〇〇マソン岳から、八木原明男を本部まで送り、遺体収容後、搬出を遭難があつた時、現地のレンジャーが最も近道として使っているレスキューガリーを、ダイレクトに下降して、四二〇〇の地点へ降りすことにした。

今回、各キャンプの名称は、ラディンクポイント(IP)と言われている、七〇〇フィートをベイスキャンプ(BC)、一〇〇〇フィートをアドバンスベイスキャンプ(ABC)、ウインディコーナリー上二二〇〇フィートをキャンプI(CI)、そして一般にBCと言われている一四〇〇フィート(四二〇〇)をキャンプII(C2)と言った。山田パーティーのアタックキャンプは行なうことになり、翌十三日、

中には、下山祝いとでも残しておいたであろうビルが、山田さん達を待っているかの様に置かれていた。

十八日、天気は下り坂、十七人は、四パーティーに別れ、各々、アンザイレンをして氷河上を進む。初めて履くスノーラケットは意外と歩きにくく、凹凸に時々足を引っ掛けストックでバランスを取りながらの歩行。途中、山田パーティーのペナントを見つけ、それを目印に、所々口を開けているクレバスをかわしながら、一日目は北東カヒルトナ氷河出合に幕営。二日目も視界は悪かったが、予定通りカヒルトナ氷河直下のABCへ到着。入山の日へヘリコプターで荷上げしておいたデポ品の掘りおこしと、荷物の整理を行なう。

二〇日、ウインディコーナリーのCI建設の為、佐藤、小西、私と三人で先発、途中遺体搬出の時、安全確保の為に、三ピッチのロープをフィックス、当面必要な物資を上げてもらい、私達三人はC1に幕営。

二十一日、風が強い。ウインディコーナリーと言われている所以であるが、ガスもかかっている。しかし小西が一度来ているので、彼のガイドで佐藤がピッチを伸ばす。北東フォーク氷河に落ちるコルに出、ここからいよいよスタスタに切れた、クレバス帯へと入って行く。途中山田パーティーが立っただと思われ、ペナントを見つけ、ホワイトアウトの中、クレバス帯を縫うように進む。ルートは左よ

